企業・市・JA連携によるらっきょう産地再生の取組み
―鹿児島県薩摩川内市―

主任研究員　室屋有宏

1　担い手不足から企業参入を誘致

鹿児島県薩摩川内市の海岸線沿いの砂丘地は、「唐浜らっきょう」の産地である。唐浜らっきょうは、生食用として色が白くシャキシャキとした食感が市場関係者や消費者に評価されているが、担い手不足等から産地としての維持が困難となってきている。

同市のらっきょう栽培面積は、1998年の22haから03年は18haへ、出荷量は同じく405トンから289トンへと大きく縮小し、また生産者の平均年齢は現在72歳前後と高齢化が進んでいる。

農業内部から担い手が容易に見いだし難い状況のなかで、市は企業の農業参入によって唐浜らっきょうの産地作り・ブランド化をやり直したいとし、04年度（当時は構造改革特区）から農地リース方式による企業参入を推進している。

2　行政とJA・地域が一体となった参入支援

一般に、農業参入した企業は初期投資の負担が大きく、また営農技術、販路等の問題を抱え経営状態は総じて厳しいとされる。こうした実態も踏まえ、薩摩川内市は参入した企業が「直ぐにらっきょう栽培が可能な状態」を提供することを基本方針に、JA・地域と一体的な参入支援態勢を取っている。

市の支援としては、①圃場整備（遊休地の整地、除草、立木伐採、排水対策等）、②生産者の高齢化等に対応した省力化措置（従来は農家個別に行っていた乾燥・皮むき、選果工程を、集出荷施設を整備し集約する）③農業公社設立による農地保有合理化事業、④優良種子確保事業、⑤労働力確保支援等を行っている。さらに、市の営農指導員や県の改良普及センターが連携して、効率的な生産方法の開発も行われている。

他方、参入企業は市と結ぶ協定のなかで、地元のJAさつま川内らっきょう部会に加入し、部会及び関係機関による生産指導を受け環境保全に配慮した生産を行い、また、JAの集出荷施設の利用による共同出荷を行うことが盛り込まれている。

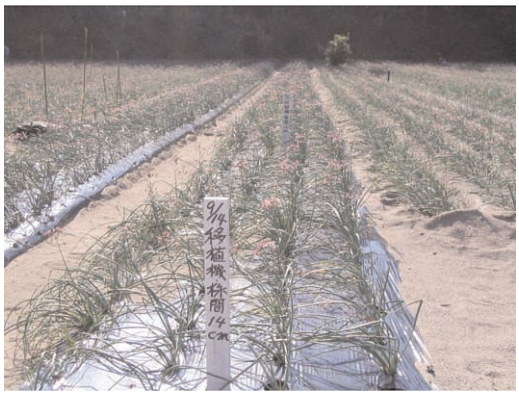
農業経営の経験のない企業にとって、地元JAの部会・農家から日常的に指導・助言を受け営農することやJAを通じた共販は大きな参入支援となっている。

3　企業の参入状況

薩摩川内市で最初の参入企業は、鹿児島くみあい食品(株)だった。同社は鹿児島県のJAグループが設立した協同会社であり、量販店等への青果物の直販と漬物、冷凍食品等の食品加工を主な事業としている。

同社の参入の直接の経緯は、市からJAさつま川内及びJA鹿児島県経済連を経由して参入打診を受けたことだった。一方、同社としても農業参入により、①自らの事業基盤である地域農業・農家への支援、②同社の直販先からのらっきょう供給の安定化の要請を以前から受けており、これに応える形で産地開発に関与する、③新規事業として直営農業の展開

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。



鹿児島くみあい食品のらっきょう栽培圃場

第1表 企業参入後のらっきょう栽培実績

	04年度	05	06	07
面積（ha） （うち出荷用面積）	21 （18）	24 （21）	30 （26）	26 （22）
参入企業数	1	7	4	4
出荷量（トン）	319	308	295	…
販売額（万円）	12,360.8	11,205	11,696	…
生産者数（人）	113	112	118	117

資料　薩摩川内市
（注）　上記計数は農協共販部分を対象。共販外の出荷分が若干ある。

を試みたいという目的があった。

同社のらっきょう栽培面積は04年に１haから始まり、06年に2.9haへと拡大した。同時に、10月に植付を行い、翌年5～6月に収穫する通常の栽培サイクルに対して、他産地との差別化等から年々早掘りを進めている。早掘りによって、らっきょうは、よりみずみずしく柔らくなるが、一方で反収は低下する。

いままでのところ、近年の天候不順等から、当初計画に比べると生産量、売上高は下回っているが、これはいたしかたないとみており、長期的な視点で産地作りの支援を行っていく姿勢である。

同社の場合、直販組織として首都圏を中心に既に販路を持っており、この点が農業参入の大きな強みとなっている。漬物用は低価格を武器とする中国産、また国内では鳥取産が有利であり、唐浜らっきょうは生食用として差別化を図り、食べ方を具体的に提案しながら販売に力を入れて行く方針である。

04年度の鹿児島くみあい食品の参入に続いて、05年度には新たに６社の建設会社が参入した。しかし、翌06年には早くもこのうちの３社が「本業の不振」を理由に撤退している。撤退企業が借りていた農地は、他の参入企業に貸し付けられたが、一部は再び遊休化する結果となった（現在、建設３社の借入面積計は3.8ha）。たとえ、行政、地域の支援があっても、企業の農業経営の難しさがうかがえる。

4　安定的な供給体制はまだ途上

企業の農業参入後の薩摩川内市のらっきょう栽培実績をみると、栽培面積、出荷量、販売額とも減少に歯止めをかける効果はみられるものの、拡大軌道にあるとまではいい難いのが実情である（第１表）。

生産に関しては、近年の異常気象の影響が大きく、反収は04～06年度と年々ワースト記録を更新したこと（07年度は回復）、また早掘り推進も反収の低下につながった。

市場のニーズとしては、鹿児島産らっきょうは健康食品として差別化・ブランド化を強めるために、出荷時期をより早めて欲しいとの声が強い。しかし、現状早掘りの安定的供給には技術的な課題があり、栽培技術を早急に再構築する必要がある。

唐浜らっきょうに対する需要そのものは強いだけに、いかに高品質のものを多く安定的に生産し、計画出荷できるか、参入企業、行政、JA・地域の連携、協力が今後ますます重要になってきている。

（むろや　ありひろ）

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。